土　岐　市　教　育　研　究　所
Ｔ　Ｅ　Ｌ　0572-54-1111　(内281)
Ｆ　Ａ　Ｘ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所　報　Ｎｏ．５３０
発行責任者　所　長　本多　直也
発　行　日　平成２８年１１月１０日
題　字　山田　恭正　教育長

『希望の窯焼成』

撮影者　濃南中学校　宮腰　佳奈　先生

座高測定

土岐市教育研究所長　　本多　直也

学校の風物詩として、新学期早々の健康診断があります。児童生徒の健康の保持増進を図るために、健康診断は重要な役割があり、学習指導要領でも特別活動の中の健康安全・体育的行事として位置付けられています。 そして児童生徒は「発育測定」で身長の伸びに喜びを感じたり、思春期の中学生の中には体重に嫌悪感？を抱いたりして何かと話題の多い時間でもあります。

その健康診断、学校保健安全法施行規則の一部改正があり、平成28年度より「座高測定」を実施しなくなりました。歴史をひも解くと、座高測定は昭和12年、内臓の発育などを確認するために始まったとのことです。戦後も上半身と下半身の長さのバランスをみることで、発育状態が測定できるうえ、机や椅子の高さを決めるのにも役立つと考え、続けられてきました。しかし、現状ではこの座高測定の結果がほとんど活用されておらず、成長を確かめるには、身長や体重曲線の方がより確かであることがわかってきました。そこで78年続けられた「座高測定」が健康診断の項目から削除されることになったのです。極めて荒っぽく言えば「意味がないことがわかった!!」からです。

学校はどちらかというと大きな変化を嫌う傾向にあります。「今までは〇〇だった。」「これは本校にとってなくてはならない活動だ。」との意見のもと、微調整をしながら、「例年通り」に進むことが多いです。しかし、世の中は情報機器の進歩があったり、少子化による小規模の学校が毎年増えたり、その様相は50年前とは雲泥の差です。「半世紀以上も続いたことをやめることはできない。」ではなく、現実をみて何が本当に必要なのかを考えた結果、「座高測定」を実施しなくなったと思います。

教育の推進には、現実をみる【確かな目】と、変化を受け入れる【勇気】が必要です。学校の中には、他にも「座高測定」があるのではないでしょうか。

自然の魅力溢れる陶史の森

陶史の森　施設長　　楓　正敏

１ はじめに

定年退職をした後、陶史の森に勤めています。陶史の森は、岐阜県と土岐市が整備してきた県下第一号の生活環境保全林（森の楽園）です。

およそ百年前、陶史の森一帯の山々は地場産業である窯業の燃料として樹木が切り出されていました。そのために荒廃し活力の低下した森林を改良し、花木や実のなる木を植え、遊歩道や利用施設などを整備し、保健休養や自然観察の場となるように治山事業が行われました。

陶史の森は昭和 50 年にオープンし、その後も整備を続け充実を図り、まさに森の楽園となっているのが今の陶史の森です。

２ 陶史の森を訪れる人たち

陶史の森には、毎日多くの人が訪れます。特に多いのが就学前の子どもたちとその家族です。

森の幼稚園として、陶史の森を拠点に活動しているグループがあります。子どもたちを観ていると、雨の日も雪の日も生き生きと森の中で活動しています。保護者の意図は、

・自然の中で、仲間と遊び心と体のバランスのとれた発達をする

・自然の中でたくさんの不思議と出会い、豊かな感性をはぐくむ

・自然の中で、自ら考え行動する力を付ける

ことを願ってみえると考えられます。自然には豊かな発達を促す魅力が詰まっています。

次に多いのが、第一線を退かれた方々です。森を散策する人、蝶やとんぼ、花をカメラに収める人などそれぞれの目的を持って来園されます。展望台からは御嶽山や白山などの大パノラマが広がり、大型双眼鏡をのぞけば岐阜城や名駅前のビル群までも観ることが出来ます。

陶史の森は、湿地があちらこちらにありそこでしか生息しないハッチョウトンボなどの昆虫やシラタマホシクサなどの希少植物などが豊富にあります。日々変化している自然に直接触れることで多くの感動を得たり、自然から学んだりすることが出来ます。

３ 本当に理科教員だった？

理科の教員だからということでこの職場を薦めて頂いたと思いますが、恥ずかしながらあまりにも動植物を知らないことに気づかされました。

森で捕まえた昆虫を虫かごに入れて「これ、何という名前ですか？」と尋ねてくる親子。

カメラを提げて「グンバイトンボはどのあたりにいますか？」と尋ねてくる人。

「このきのこ食べられますか？」と持ってくる人。等々、私たち自然観察指導員に質問が投げかけられます。はじめの頃は、初めて見聞きする動植物が多くて図鑑で名前等を調べるといった具合でした。子どもの頃から野山や川で遊び、動植物については人よりも多少は詳しいと自負して教壇に立っていたつもりが、とんでもない勘違いをしていたようです。

若い頃に、センター研修のなかで「理科の教員だったら、校舎回りに生えている植物の名前ぐらい調べて覚えなさい。」と指導されたことを思い出します。振り返ってみれば専門性を高めるといいながら教材研究より指導技術の方に多くの時間を割いていたのではと反省しています。

〈自然教室の様子〉

４ おわりに

森を歩くと、毎回新たな発見があり感動があり飽きることがありません。それだけ自然は奥深く魅力に溢れています。以前から直接体験の重視と叫ばれていますが、子どもたちにはもちろんのこと先生方にも是非陶史の森を訪れて自然の魅力を味わって頂きたいと思います。

土岐市教育研究所

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果について（結果概要）

1　土岐市の現状

（1）学力について　（＊全国の正答率と市の正答率の比較　A【基礎的知識】　B【活用の力】）
（◎：大きく上回る　○：やや上回る　□：ほぼ同じ　△：やや下回る　▲：大きく下回る）

小学校	国語		話す・聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
		A	△	□	□	□
		B	□	□	□	
	算数		数と計算	量と測定	図形	数量関係
		A	□	△	□	△
		B	□	□	□	□
中学校	国語		話す・聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
		A	□	□	□	□
		B		□	□	
	数学		数と式	図形	関数	資料の活用
		A	□	□	□	□
		B	□	□	□	□

小学校（・傾向　△課題）	中学校（・傾向　△課題）
・国語Ａの「話す・聞くこと」がやや下回るものの、A、Ｂともに、ほぼ全国平均である。 ・２６、２７年度と比較すると、A、Ｂ問題ともに全国平均との差は縮まっている。 △漢字の読み・書きや、話し手の意図をとらえながら聞くこと、自分の意見と比べるなどして考えをまとめ、話したり書いたりすることに課題がある。	・国語Ａ、国語Ｂともに、ほぼ全国平均である。 ・２６、２７年度と比較するとＢ問題は正答率が向上し、全国平均を上回った。 △語句の意味を理解し、文脈の中で正しく使うことや根拠を明確にして自分の考えを書くことに課題がある。
・算数Ａ、Ｂともに全国平均に近づいてきている。 ・２６、２７年度と比較するとＢ問題の全国平均との差は縮まっている。 △割合に関わる問題や式の意味の理解に関わる問題を解くことに課題がある。	・数学Ａは全国平均よりやや高い。数学Ｂはほぼ全国平均である。 ・２６、２７年度と比較すると、Ａ問題は正答率が向上している。 △根拠を明らかにしてなぜそうなるのか理由を説明することに課題がある。

（2）学習や生活に関する習慣と意識について（全国と比べた傾向　○高い　△低い）

○社会参加・社会貢献に対する意識
○ノートに学習の目標とまとめを書くこと
○図書館に行く、読書が好き
○家庭の学習時間
△読書時間
△家庭学習の内容について（予習・復習）
△内容を理解して相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかり伝える
△文を書くことに対する意識
△学校にいくのは楽しい

○社会参加・社会貢献に対する意識
○家庭学習の時間
○予習・復習など計画的な家庭学習の取り組み
○学習に対して主体的（課題に対して自ら考え、自分から取り組んでいる。授業の中で分からないことがあったら尋ねる。等）
△将来の夢や目標をもっている
△読書が好き
△自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい
△文を書くことに対する意識

2　今後に向けて

学力が高まっている基盤

○授業について
・課題提示が明確になっていること
・分からないことは尋ねて明らかにするという生徒の意識が高まっていること
・学習内容を確かめる指導が充実したこと
・個の実態に応じた支援を工夫していること

○家庭学習について
・家庭学習の習慣化（時間の確保）

さらに高めるために

○授業について
・子どもの主体性を大切にした学習指導
・子ども一人一人の表現力を向上するための指導・援助の工夫

○家庭学習について
・家庭学習の計画的な取組の推進（予習復習等、学習内容の充実）
・図書や新聞の活用、読書活動の充実

学力向上の取組から

平成２８年度「学力向上計画訪問」の実践紹介　　土岐市立妻木小学校

Ⅰ　学力分析などによる児童生徒の実態について（H27.28 全国学力・学習状況調査結果の分析より）

【テストの結果から】
・同一学年の経年変化からみると，国語，算数ともに，基礎・基本の定着に改善がみられる。
・算数において，基本的な計算技能は定着しているが，思考力を問われる問題には，弱さがみられる。また，国語に関してはＢ問題に改善がみられる。
【質問紙の結果から】
・県・全国に比べ，生活習慣の定着や規範意識が高い。また，算数への関心等の意識も向上した。

Ⅱ　分析の結果から，指導改善の重点について（共通理解して取り組んでいること）

こうした実態から，改善サイクルⅠまでの成果である基礎・基本の定着をより一層図ることに加え，指導改善サイクルⅡでは，仲間とともに考え説明する力を伸ばすことが必要であると考えている。また，家庭学習の量を増やすと共に，授業の復習に力を入れる指導に努める必要がある。そこで，改善サイクルⅡでは，「思考・判断・表現力の育成」に重点をおき，授業改善に取り組んでいく。

（１）改善サイクルⅠまでに改善してきたこと

①算数の少人数指導における児童の実態把握（３学年以上で実施）
・全単元で，レディネステスト・単元テストの誤答分析を行い，実態把握を指導改善に生かしてきた。
②授業終末場面での評価問題の活用
・定着状況の見届けのため，チェック問題を位置付け，全ての児童を時間内に必ず見届ける。（全学年）
③成果として
・一人一人に目を向けたつまずきに対する指導が，より具体化するようになった。
・授業と単元の終末で必ず全員を見届け，指導することができるようになり，分からないまま次に進むといった姿が少なくなった。また，授業に臨む教師の意識が向上した。

（２）改善サイクルⅡで共通理解し，実践していくこと

①実践してきたチェック問題をさらに充実させる
②思考・判断・表現力を見届ける評価の仕方を開発していく
③追究過程の場面における学習状況の見届け方を工夫していく

Ⅲ　学力向上計画訪問における研究授業の視点と具体的な指導・援助などの手立て

研究の視点（小学２年生　算数「ひき算の筆算」の研究授業実践）

（１）『繰り下がりのあるひき算の仕方の理解を見届けるために、ノートの斜線の記述に着目』
⇒〇斜線を引けなかった児童を把握することができ、追究時の支援として有効であった。
△理解が不十分でも斜線をひいてしまう児童への指導があいまいであった。

（２）『全員にやり切らせるチェック問題を精選し、評価の見届けのための時間を確保』
⇒〇終末場面での定着状況の見届けを意識した授業展開が実践され、必要性が再認識できた。
△評価問題の時間確保を意識するあまりに、学習状況の見届けが不十分であった。

Ⅳ　学力向上計画訪問において明らかになった成果と課題

〇個人追究における学習状況の見届けや，評価問題などの定着状況の見届けなどを全職員で共通理解して取り組むことができた。
▲ペア，全体追究時の学習状況の見届け方をさらに工夫する必要がある。

「私の教育実践」

ぶつかり合いこそ、伝えるきっかけ

泉西小学校附属幼稚園　教諭　水野　咲希

“自分の思いを自分の言葉で伝えられる子”“友達に優しくできる子”を日々の中で大切にしています。４歳という年齢は相手に思いを伝えられる子もいれば、うまく伝えられず、手が出てしまう子もいます。そんな時こそ、伝えるきっかけとして、相手の気持ちを代弁したり、どうするとよかったのか考えられるような声掛けをしたりして、自分で考え、相手に伝えられるようにしています。また、内気な性格で自分の思いを伝えられない子、教師へも言いに来られない子へは、表情などから読み取り、個別で気持ちを聞いたりして、自分で伝えられるようにしています。聞いてもらえる安心感を味わうことで「聞いてほしい！」「伝えたい！」という思いにもなると考え、話をじっくり聞く場面も大切にしています。

友達に優しくできるには、“自分がされて嬉しいことは相手も嬉しい”　“自分がされて嫌なことは相手も嫌だ”と相手の気持ちに気付くことだと考えます。嫌なことをしてしまった時、まずは“自分がされたらどうか”と考えられるような声掛けをしています。また４月当初は自分中心で周りへ目を向けることができなかった子ども達が、自分がされて嬉しかったから友達にもやってあげようと友達が困っていたら助けてあげたり、できないから手伝ってあげようとしたりと相手へも目を向けられることが増えてきました。トラブルが起きた時こそ、伝えるきっかけとして、これからもその都度、相手の気持ちに気付けるような声掛けを心掛けていきたいと思います。

「私の教育実践」

進んで表現する子を育てるために

濃南小学校　教諭　中根　のり子

本校の研究主題は「進んで表現する子の育成」である。全国学力学習状況調査や校内の学習アンケートから、自分の考えを表現したり、適切な言葉や表現を使って説明したりする力が弱い実態が明らかになった。そこで、国語科説明文教材を通して、表現方法の基礎を身に付け、『進んで表現する子の育成』を目指している。

私はこの研究主題のもと、本学級の児童が説明文教材を楽しみながら学ぶ中で、表現方法の基礎を身に付け、意欲的に言語活動に取り組めることを願って実践を行っている。

１学期の説明文教材「こまを楽しむ」では、まず「初め、中、終わり」の「中」の部分の段落内の文章構成について学んだ。その後、同じ文章の構成を使って「こんなこまがあったらいいな」というテーマで自分が作りたい空想上のこまについて説明する文章を書くという言語活動を設定した。児童は空想上のこまを楽しんで考え、「こまを楽しむ」で学習した「こまの名前と楽しみ方→こまの作り→回っているときの様子や回し方」という段落構成に従い、意欲的に説明の文を書くことができた。そのため、交流する時も、「自分の考えたこまをみんなに紹介したい。」と意欲的に交流し、「〇〇さんのこまが楽しそう。」と仲間のこまの説明も興味をもって聞くことができた。

これからも、児童の興味関心を引くような言語活動を設定し、児童に表現することの楽しさを味わわせていきたい。

「心にひびく言葉」

変わること、変わらないこと

泉小学校　教頭　梅村　千恵美

「私、コピーライターになりたいんだ。」

これは、私が高校生の時に、仲の良かった幼なじみが言った言葉だ。

「それって何？何を言ってるの？」

当時、日本海側の小さな町で生きていた私は「コピーライター」ってものが何なのか、そもそもそれが職業であることさえも知らなかった。糸井重里や林真理子が、脚光をあびる少し前のことだった。

私の故郷では、当時から共働きをしていない大人など見たこともなかったが、自分が知っている、周りの大人が（特に女性が）就いている職業は、限られていた。情報も今ほど発達していない頃だから、片仮名の名前の職業をすぐ近くにいる友達が目指しているなんて、本当に驚きだった。彼女はその数年後、本当にコピーライターとなり、現在は、広告の会社を起業して、精力的に働いている。

「AI の発達によって今後、消えていく職業」という記事を目にするようになった。その時、いつも前述の友達の言葉を思い出す。今ある職業がこれから１０年先、２０年先にあるかどうか分からない。反対に、今はない職業が生まれることにもなるだろう。今、当たり前だと思っていることがいつまでも同じではないはずだと…。

学校で私たちの目の前にいる子どもたちが成人したとき、保護者となったとき、どんな社会になっているのだろう。なりたい仕事があって、それに向かって努力していくだろう子どもたちに、今、どんな力をつけていけば良いのだろう。今までと同じ教育や考え方が通用することはないだろう。

しかし、反対に、いくら科学や技術が発達して変わっていくことがあったとしても、人でしかできないことや人と人のつながりを必要とすることは、きっと求められるであろう。学校で大事にしたいのは、このことではないかと考える。では、自分はどうあればいいのか。激しい変化が予測されるこれからの時代。どんな社会になっても、夢を持ち、叶えるために力を発揮できるエネルギーをもつ子どもを育てたいと願って、自分自身の在り方を考えていきたい。

〈購入図書の案内〉

※新しく購入した図書の紹介です。研究所にありますので活用ください。

◇アクティブ・ラーニング実践の手引き（教育開発研究所）

◇「チーム学校」まるわかりガイドブック（教育開発研究所）

◇楽しく豊かに学級・学校生活をつくる特別活動（国立教育政策研究所教育課程研究センター）

◇やき先生の特別活動講座「学級会で子どもを育てる」（文溪堂）

◇心を育て、つなぐ特別活動～道徳的実践へのアプローチ（文溪堂）

◇二瓶弘行の系統的に育てる物語の読みの力（文溪堂）

◇教師力を鍛えるケースメソッド１２３～学校現場で生じる事例とその対応（ﾐﾈﾙｳﾞｧ書房）

◇問題解決的な学習で創る「道徳授業 超入門」（明治図書）